

“ 見えない ” 努力、“ 見える ” 努力。

前号で予告したとおり、4月下旬、九州・鹿児島を訪ねてきた。およそ1年ぶりに再会した薩摩の街々。現代社会のドラスティックな変化とは裏腹に、変わることなく静かにたたずむその風情には、歴史に刻まれた伝統と文化の重さを垣間見ることができる。今月の『流通・通』は、近代日本発祥の地といわれる薩摩の国で出会った話題から。



“ 見えない ” 努力で価値を創造する!

旅の舞台は薩摩半島。昨年はずスケジュールの都合で訪問できなかった知覧町から指宿市、鹿児島市、桜島町を周るコースであった。とりわけ興味深かったのが「薩摩の小京都」と呼ばれる知覧町である。かつて本土最南端の特攻基地があった町として知られ、その歴史を今に伝える知覧特攻平和会館には一年を通じて大勢の来訪者が訪れる。また、近年映画『ホタル』のロケ地になったことから新たな観光スポットが生まれ、筆者が訪ねた日もゴールデンウィーク前の平日だというのに観光バスなどがひっきりなしに走っていた。

知覧町が「小京都」と呼ばれるゆえんは、約260年前に造られたといわれる武家屋敷群の存在だ。国の名勝に指定されている7庭園を含む10あまりの庭園が連なっていて、国の重要伝統的建造物群保存地区や日本の道100選にも選定されている。ここの武家屋敷群の特徴はイヌマキの生垣と美しい庭園。敵の襲撃を防ぐため高い石垣や板塀を用いることが多い武家屋敷にあって、南国の気候に適した風通しのよい生垣を築くとともに、その生垣を活かして刈り込み、周囲の山々と一体化させた見事な借景庭園を創り上げている。

筆者が感心したのは庭園ばかりではない。武家屋敷群以外の道筋にもイヌマキが植えられ、美しい街並みを演出していたことだ。知覧町で

は昭和48年(1973)から7本の路線、延長6,380メートルに約800本のイヌマキを植樹した。古くから生垣や庭木として親しまれてきたイヌマキを街路樹として整備することで、武家屋敷群との調和を図ったのだという。ヤシ類などを植え南国情緒を醸し出すまちも少なくない九州南部にあって、地域の特徴と個性を發揮した取り組みといえよう。そして何より先筆者を惹きつけたのが、それらが見事に手入れされていたことである。歴史や伝統に胡座^{あぐら}をかくのではなく、しっかりと手入れして付加価値を高めることで訪れる人々を魅了している。その目に見えない町と地域の人々の努力が、知覧町の魅力を支えているのである。

“ 見える ” 努力で価値を高める!

読者諸氏が鹿児島の借景庭園としてすぐに思い出すのが、磯庭園として親しまれている島津家別邸・仙巖園かもしれない。鹿児島市の中心部からやや北方、磯地区に造られた広さ約5万平方メートルの広大な庭園だ。万治元年(1658)に19代島津光久がこの地に別邸を構えたのがはじまりといわれ、桜島を築山、錦江湾を池にみたくて造園されたという。なかには千尋巖や曲水の庭、日本で初めて移植されたといわれる江南竹林など中国風の造園が施されているほか、琉球王朝から献上されたといわれる望嶽楼や日本初のガス灯・鶴灯笼など、異国の文化を感じさせる素

材も少なくない。

この仙巖園で目についたのが、園内を案内するシニアガイドと着物姿の晴れやかな御殿案内人。今では珍しくもない光景かも知れないが、その言葉遣いや振る舞いがやさしい。待機所などで声がかかるのを待っていたりするのではなく、庭園の入り口付近や御殿の玄関口などで風景に溶け込むようにたたずみ、静かに目配りをしていた。ただ一つ残念だったことは、曲水の庭を散策中に遭遇した保守作業にあたっている人たち。快晴の日曜日だというのに、作業服に長靴という出で立ちで、遣り水の中を闊歩していた。曲水の庭といえば、平泉・毛越寺でも行われる平安朝の優雅な行事「曲水の宴」の舞台。往時の風情に思いをはせながら散策している目の前で、杯が流される遣り水を長靴で歩かれたのでは興ざめする。とはいえ、彼らも仕事だったのである。何か不都合があつて点検していたのかも知れない。そういう場合はどうすればよいか。その“仕事”も風景になじませ、情緒を演出してしまうことが大事だ。たとえば、作業衣姿にわらじを履き、手作りの竹製の道具を手に仕事をしていれば、当てもこんな風に作業していたのかなあ、と見る人に知的満足感を与えることができる。もてなしには、こうした“見える”努力も必要なのである。

経営コンサルタント 岩淵公二
(ジーベック代表取締役)